

## (7) 鬼無里の伝統的祭礼にみる歴史的風致

### ア はじめに

鬼無里の地形は、周囲を荒倉山、虫倉山、戸隠表山、一夜山、物見山などに囲まれ、中央部に裾花川とその支流の小川や天神川が流れ、盆地様の溪谷形をしている。集落は、周囲の山々を流れる裾花川や小川流域に点在しており、集落ごとに神社が配置されている。また、鬼無里には、鬼女紅葉伝説、木曾義仲にまつわる伝承、遷都伝説にちなんだ東京、西京といった集落の名称が残っている。そのほか奥裾花峡谷(県指定名勝)やミズバショウの大群落がある。

江戸時代、鬼無里には、松代往来、戸隠往来、安曇往来、高府往来、早川道などが通っており、街道を利用して鬼無里で生産された麻、畳糸、和紙等が移出し、塩、米、酒、魚等が運び込まれ、域内外の人と物資が行き交って交易の場として市が開かれていた。市は、天和3年(1683)に現在の町区において開設が許可され、当初は六斎市(1カ月に6回開かれた定期市)であったが、安永9年(1780)に九斎市(1カ月に9回開かれた定期市)になった。九斎市は、月の1、2、8に当たる日に開かれ、取引される商品の大半は麻であった。

現在の町区で7月15日から一週間執り行われる祇園祭は、九斎市の名残をとどめ、市の神や津島牛頭天王に奉納する祭屋台が伝承されている。



江戸時代の主なる往来(S=1:100,000)  
(『信越古道』(信越古道会、平成22年(2010))を改編してリライト)

## イ 建造物

## (ア) 白髯神社本殿(重要文化財)

白髯神社は、裾花川右岸の河岸段丘上の鬼無里日影祖里田に位置し、日影三区(上平区、中区、西京区)の人々を氏子とする産土神(祭神猿田彦大神)で、境内に拝殿、本殿、社務所、神楽殿、境内社がある。本殿は、一間社流造、柿葺で桃山時代の建立と考えられており、昭和34年(1959)に重要文化財に指定されている。



白髯神社本殿  
(重要文化財、桃山時代)

神社は、明治6年(1873)4月に長野県第59区の郷社として社格昇進し、明治40年(1907)4月に神饌幣帛料供進神社に指定され、明治41年(1908)に大姥神社、秋葉神社、金刀比羅神社の三社を合祀し、昭和28年(1953)3月に宗教法人となり、現在に至っている。

神社は、明治6年(1873)4月に長野県第59区の郷社として社格昇進し、明治40年(1907)4月に神饌幣帛料供進神社に指定され、明治41年(1908)に大姥神社、秋葉神社、金刀比羅神社の三社を合祀し、昭和28年(1953)3月に宗教法人となり、現在に至っている。

## (イ) 鬼無里神社本殿(長野市指定有形文化財(建造物))

鬼無里神社本殿は、裾花川及び裾花川に合流する小川流域沿いに位置し、規模の大きい一間社流造の社殿である。享和年間(1801~1804)に焼失したため、現在の本殿は、前身の建物様式を模倣して享和年間に再建されたものとされている。

本殿の社額、鏡台などの装飾彫刻は、江戸時代末期から明治時代にかけて、上州、北信濃、上越、越中で数多くの神社仏閣の装飾彫刻を手がけた彫工北村喜代松の手によるもので、ひときわ力強く精巧な彫刻が施されている。拝殿の背後に本殿覆屋、通りをはさんで舞台(神楽殿)、社務所が配置されている。



鬼無里神社本殿(長野市指定有形文化財(建造物)、享和年間)

## (ウ) 松巖寺観音堂(長野市指定有形文化財(建造物))

松巖寺は、元和元年(1615)創建の曹洞宗寺院で、鬼女紅葉の菩提所である地藏院が前身と伝えられている。観音堂は、寛永2年(1625)又は寛永3年(1626)の建立で、間口3間、奥行4間、妻入、入母屋造である。外観は質素だが、内部の欄間に肉厚の豪快な彩色彫刻が付き、格天井の彩色文様と併せて江戸前期の様相を濃厚に伝えている。

また、松巖寺の経蔵と鎮守堂も長野市指定有形文化財(建造物)に指定されている。



松巖寺観音堂  
(長野市指定有形文化財(建造物)、  
寛永2年(1625)又は寛永3年(1626))

## (エ) 諏訪神社本殿(長野市指定有形文化財(建造物))

諏訪神社は、<sup>たけみ</sup>建御名方命、<sup>な</sup>菅原名方命、<sup>ほんだ</sup>誉田別命、<sup>おおやまづみ</sup>大山祇命を祀る旧村社で、<sup>わきょう</sup>和協組、峯組、山内組、平組の産土神である。飯綱社(岡荒井)、皇大神社(坂屋)を合社している。小川左岸の断崖上の平坦地を境内として、本殿、拝殿と神楽殿が相対する配置となっている。

本殿は、棟札から文化2年(1805)の再建で、覆屋の中であり、三間社流造、柿葺、軒唐破風付の社殿である。また、木割や彫刻に鬼無里で唯一の立川流の技法が見られる。工匠は、諏訪の立川富棟と鬼無里の山口藤蔵と推定されている。立川流は、長野県諏訪市から出た工匠で、彫刻の主題に人物像(仙人等)と写実的動植物を用いることを特徴としており、長野県、東海地方を中心に千葉、滋賀、京都にまで、江戸時代中期から後期にかけての作品が見られる。



諏訪神社本殿  
(長野市指定有形文化財(建造物))、文化2年(1805)

## ウ 活動

## (ア) 白髯神社の祭礼

白髯神社の祭礼は、春と秋に神々を迎え、災いを祓い、氏子の無病息災と五穀豊穡を願い、また豊作に感謝するもので、春祭り(5月3日)と秋祭り(9月の第二日曜日、大祭とも呼ばれている)が挙行されている。

白髯神社の古文書等は、明治16年(1883)の神官宅の火災で焼失したため、それ以

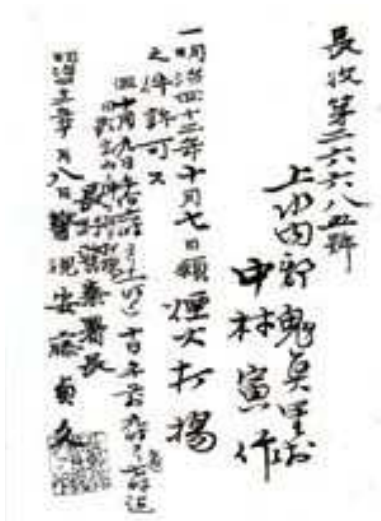
前の史料はほとんど残っていない。祭礼の挙行に関して、明治35年(1902)の祭日変更願、嘉永3年(1850)の四本柱土俵免状や明治42年(1909)の煙火打上許可証が残っており、祭礼にあわせて奉納相撲や花火(打上筒)の打ち上げが行われていたことがうかがえる。奉納相撲は、昭和20年代まで行われていたといわれている。

ここでいう神楽は、芸能ではなく、用具のことで、祭礼で用いられていた神楽(明治6年(1873))は、箱型の長持の上に社殿形の祠を載せ、貫のような太い棒を通して担げる作りになっており、向拝の柱に竜が巻き付き、虹梁は竜と武人、木鼻は象と唐獅子の彫刻で、軒唐破風に松と鶴の彫刻をはめている彫工北村喜代松の手による精緻な彫刻が施された小さいながらも見事な出来栄で、長野市指定有形文化財(工芸品)に指定されている。この神楽は、鬼無里ふるさと資料館に収蔵展示されており、現在祭礼では平成3年(1991)に新しく制作した神楽が使われている。

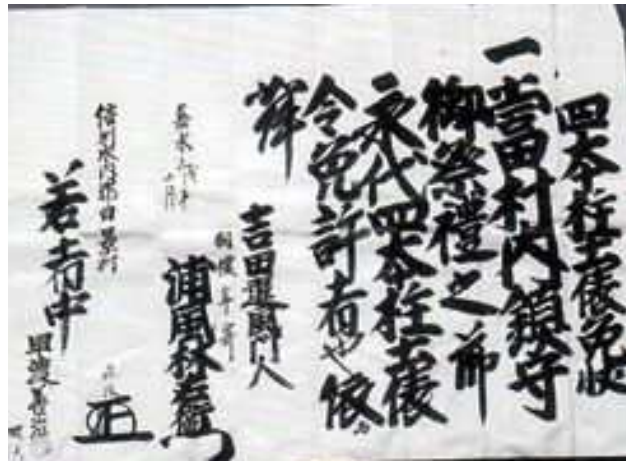


白髯神社の祭礼(昭和35年頃)

白髯神社の神楽  
(長野市指定有形文化財(工芸品))祭日変更願  
(明治35年(1902)4月16日付け)



煙火打上許可証  
(明治42年(1909))



四本柱土俵免状(嘉永3年(1850))

#### a 運営組織

早朝から氏子の総出で、境内、拝殿、本殿を清掃する。中区の祭世話人(若連)と呼ばれる祭りの世話役が中心になり、大小の幟旗を立て、神楽の飾りつけを行う。会所(祖山公民館)に中区祭世話人(若連) 13名、鳴役(獅子舞と神楽囃子) 14名、中区の神楽が集合して準備を行い、祝宴の後、獅子舞を舞って神楽巡行に出発する。かつては担いでいたが、近年はリヤカーに神楽を載せて巡行している。

#### b 神楽巡行

神楽巡行は、春と秋の祭りの中心的な祭事で、神々が降臨する際の目印となる幟を立て、神を迎えて一年の安穩と感謝を表す儀式として執り行われる。総代長の中区長を先頭に神官、祭世話人、神楽、鳴役の順で列となって進んでいく。白髯神社は、旧日影村の神社であったことから、西京区と上平区の代表の各2名が巡行に参列している。

神楽巡行の行路沿いには、両端に反りのある棟をのせた切妻造、煙出しをつけた柿葺屋根(鉄板被覆)、漆喰塗の壁の蚕室型の主屋と鞘組の土蔵のある明治時代から昭和20年代の建築とみられる歴史的建造物が残っている。

行列は、このような歴史的建造物が建ち並ぶ道筋を白髯神社に向けて、まず神社手前の中区活性化センターに向かう。境内にある社務所が手狭であるため、地域は中区活性化センターを社務所と見なしており、実際に社務所と呼んでいる。中区活

性化センターの社務所では、神官2名から4名、総代10名が待機しており、神事総代会、祝宴が行われ、獅子舞を舞って、神社に向けて出発する。

神楽巡行は、榊をのせた三方を持つ総代長を先頭に神官(献幣使、宮司)、総代、区長、目印、神楽、鳴役の順で列を組んで進み、神社の神楽殿で獅子舞を奉納する。このあと本殿の神前に供物を供え、拝殿で神事が執り行われて一連の祭礼が終わる。



神楽巡行の様子



神楽巡行の経路図(S=1:3,000)

### (イ) 鬼無里神社の祭礼

鬼無里神社の祭礼は、春と秋に行われる。戦前は、秋祭り(10月3日)が盛大に催されて屋台巡行が行われていたが、戦後に5月3日を祭日とする春祭りに主体が移り、屋台の巡行もそれに合わせて行われており、昭和3年(1928)の古写真が残されている。

祭礼のはじまりは定かでないものの、祭礼で用いられる屋台(山車)は、彫工北村喜代松による安政4年(1857)の制作であることから、江戸時代末期には行われていたと考えられている。屋台は、長野市有形文化財(工芸品)に指定され、天井に竜、正面の柱に巻いた竜、唐獅子のもつ手鞠の籠彫など精緻な彫刻が施されており、手前半分が踊り子を乗せる舞台、後ろ半分が囃子方を乗せる構造となっている。



鬼無里神社郷社奉告祭の様子  
(昭和3年(1928))



鬼無里神社の屋台  
(長野市有形文化財(工芸品)、  
安政4年(1857))

## a 屋台巡行

町区は、善光寺、安曇、戸隠、高府などに通じる街道の分岐点で、江戸時代は商人の交易の場となり、九斎市が立ったところである。鬼無里神社前の通りには、中二階を出梁造でせり出す形式や切妻造の町屋など明治時代から大正時代の建築物がみられる。

屋台は、松巖寺前で踊りを披露した後、神楽と列を作り、地域住民が綱を引きながら鬼無里神社へ向かう。鬼無里神社の鳥居前で舞を披露した後、鬼無里神社横の路線バス駐車場まで進み、鬼無里神社に向かって舞を奉納する。その後、鬼無里神社の舞台上で神楽(獅子舞)が奉納されて屋台巡行は終了する。



神楽を担ぐ様子(昭和45年(1970))



松巖寺前を出発する



鬼無里神社鳥居へ向かう



神社に向かって舞を奉納



神楽(獅子舞)の奉納



屋台巡行の経路図(S=1:2,500)

(ウ) 諏訪神社の御柱祭おんぼらさい

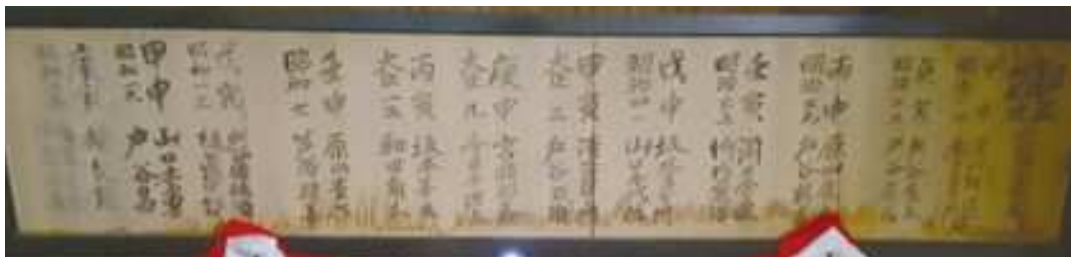
鬼無里に多くある諏訪社系神社で唯一の御柱祭おんぼらさいが行われているのが、財又地区の諏訪神社である。言い伝えによると、明治5年(1872)に鬼無里神社で御柱祭を挙行したが、翌回となる明治11年(1878)に天変地異があったため祭事は行われなかった。翌々回となる明治17年(1884)に鬼無里神社から依頼があり、諏訪神社で御柱祭おんぼらさいを挙行したことがはじまりという。



明治時代の諏訪神社の御柱祭の様子

数え年で7年に一度の御柱祭おんぼらさいは、奥山から切り出した杉の木一対(男柱の鶴、女柱の亀)の御柱を里曳きして神社前に建てる独特の神事で、寅、申の年の5月5日に大祭が執り行われている。

諏訪神社の拝殿内に掲げられている額に明治17年(1884)甲申の年に行われた第1回から令和4年(2022)5月に行われた第24回までの御柱祭おんぼらさいの挙行年が記されており、130年以上にわたって途絶えることなく御柱祭おんぼらさいが継承されている。



明治17年(1884) (上)から令和4年(2022) (下)までの御柱祭開催年を記した額

### a 山出し

令和4年(2022)の第24回御柱祭<sup>おんぼらさい</sup>では、令和3年(2021)12月4日に、神社本殿において用材の切り出しを行う人々や奉納者が参拝し、伐採、山出し用具を清めた上で山に入り、地域の共有林から、高さ約20メートル、幹回り約2メートルの杉2本を切り出す山出しを行った。

山出しの翌日の5日に、木の皮を剥ぎ、長さは大祭のたびに1寸ずつ伸ばす「一寸伸ばし」のしきたりに従い33尺5寸(約10メートル15センチメートル)の柱に仕立てた。柱は、休納所で冬を越し、御柱祭<sup>おんぼらさい</sup>の当日まで安置される。

### b 前日の準備

御柱祭<sup>おんぼらさい</sup>の前日に神社拝殿の前に建てられている前回の男柱(拝殿に向かって右)と女柱(向かって左)を倒した後、柱を短く切って割り楔<sup>くさび</sup>を作る。この楔<sup>くさび</sup>は、今回建てる御柱のねもとの固定に使われる。

また、御柱<sup>おんぼら</sup>を迎える榊車<sup>さかきぐるま</sup>を製作する。大八車<sup>だいはちぐるま</sup>に米俵を載せ、櫂<sup>かい</sup>の枝を立てて風船、短冊、おもちゃなどで装飾する。上段に積む俵には、道中の子供や観衆に振る舞うあめやお菓子などを詰める。

### c 御柱祭本祭<sup>おんぼらさい</sup>

御柱祭本祭<sup>おんぼらさい</sup>は、奉納する曳子<sup>ひきこ</sup>、関係者など多数が参加し、榊車<sup>さかきぐるま</sup>を先頭にして2台の神楽とともに御柱休納所<sup>おんぼら</sup>に御柱<sup>おんぼら</sup>を迎えに行く。榊車<sup>さかきぐるま</sup>には、乗子として和協区の氏子の中から、中学生から成人を迎える年代までの長男が選ばれ、乗り込む。御柱は、榊車<sup>さかきぐるま</sup>の出迎えを受けて、各組頭の号令と音頭のもとで、休憩をはさみながら、各休納所から男柱(鶴組)、女柱(亀組)の順で諏訪神社まで約1.5キロメートルの道のりをゆっくりと曳行されていく。



榊車を先頭に進む



笛や太鼓の囃子が響く



道中に幟が立つ



御柱の方向転換

#### d <sup>たておんぼしら</sup> 建御柱

諏訪神社に着くと、拝殿に向かって左に女柱(亀)、右に男柱(鶴)の順で建てられる。柱先端の冠落しは行わず、音頭長(音頭とりのリーダー)が使った御幣と神社の神官が用意した御幣を打ち付けてから、拝殿前に並ぶ音頭とりが音頭を唄う中、ゆっくりと<sup>おんぼしら</sup>御柱が建てられる。<sup>おんぼしら</sup>御柱のねもとは、前回の<sup>おんぼしら</sup>御柱を使って作られた多数の<sup>くさび</sup>楔でしっかりと固定される。

<sup>たておんぼしら</sup>建御柱が済むと<sup>かくら</sup>神楽殿で<sup>かくら</sup>神楽が奉納されて、山出し、里曳き、<sup>たておんぼしら</sup>建御柱と続いた当地最大の祭りである御柱祭は、これで終わりを迎える。

<sup>たておんぼしら</sup> 建御柱

## e 音頭

山出し、里曳き、<sup>たておんぼしら</sup>建御柱などの際に木遣りに代わって唄われる音頭は、独特の甚句調で、その音律、威勢のよい調子と掛け声で<sup>おんぼしらさい</sup>御柱祭の熱気を一層引き立てる。各柱3人で計6人の音頭を唄う音頭とりは、即席で唄うなど機敏さが求められる。音頭は、前任者から口伝えで伝授され、後任の音頭とりに伝承していく。

「ヤーレシメタリ、ヤーレワイ」(ヨイ、ヨイ)

「めでた、めでたのこの<sup>みはしら</sup>御柱を」(ヨイ、ヨイ)

「<sup>やしろ</sup>諏訪の社に、<sup>たてまつる</sup>ハアー奉納」

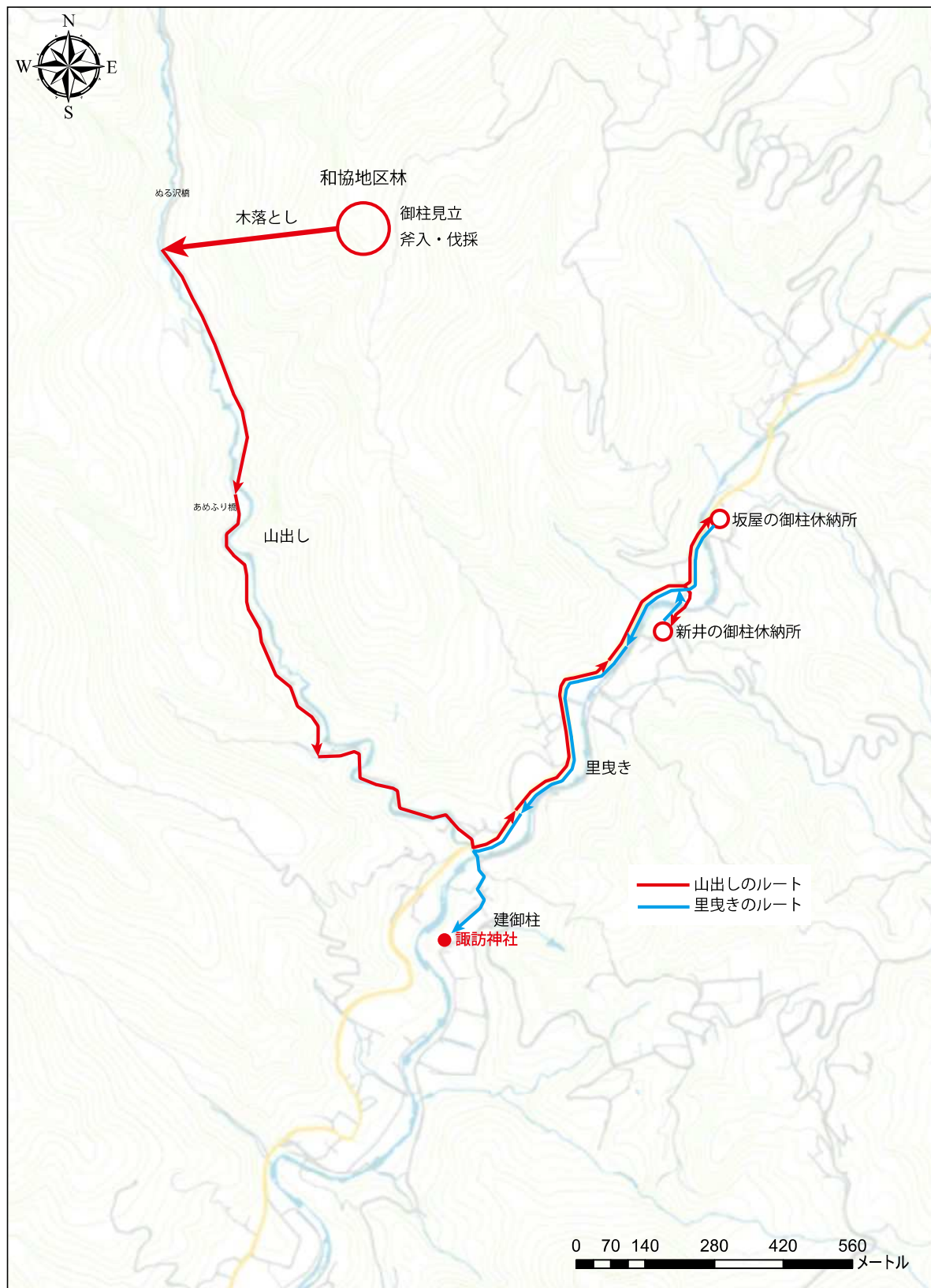
「<sup>きーづな</sup>サアー引綱」(エンサーノ、サア)

「アーレワサアーのサアー」(ヨイヨイ、ヨイヨイ)

この歌詞に続いて、「一度ごらんよ御柱祭を、和協若衆のこころ意気」、「<sup>やしろ</sup>諏訪の社はめでたい社、<sup>やしろ</sup>庭に鶴亀舞い遊ぶ」、「<sup>ひきこ</sup>さあさ曳子の皆さま方よ、ここは難所だ宮の坂」、「和協生まれで和協の育ち、音頭とりやせりや日本一」など音頭とり独自の歌詞が唄われる。



道中で音頭が唄われる



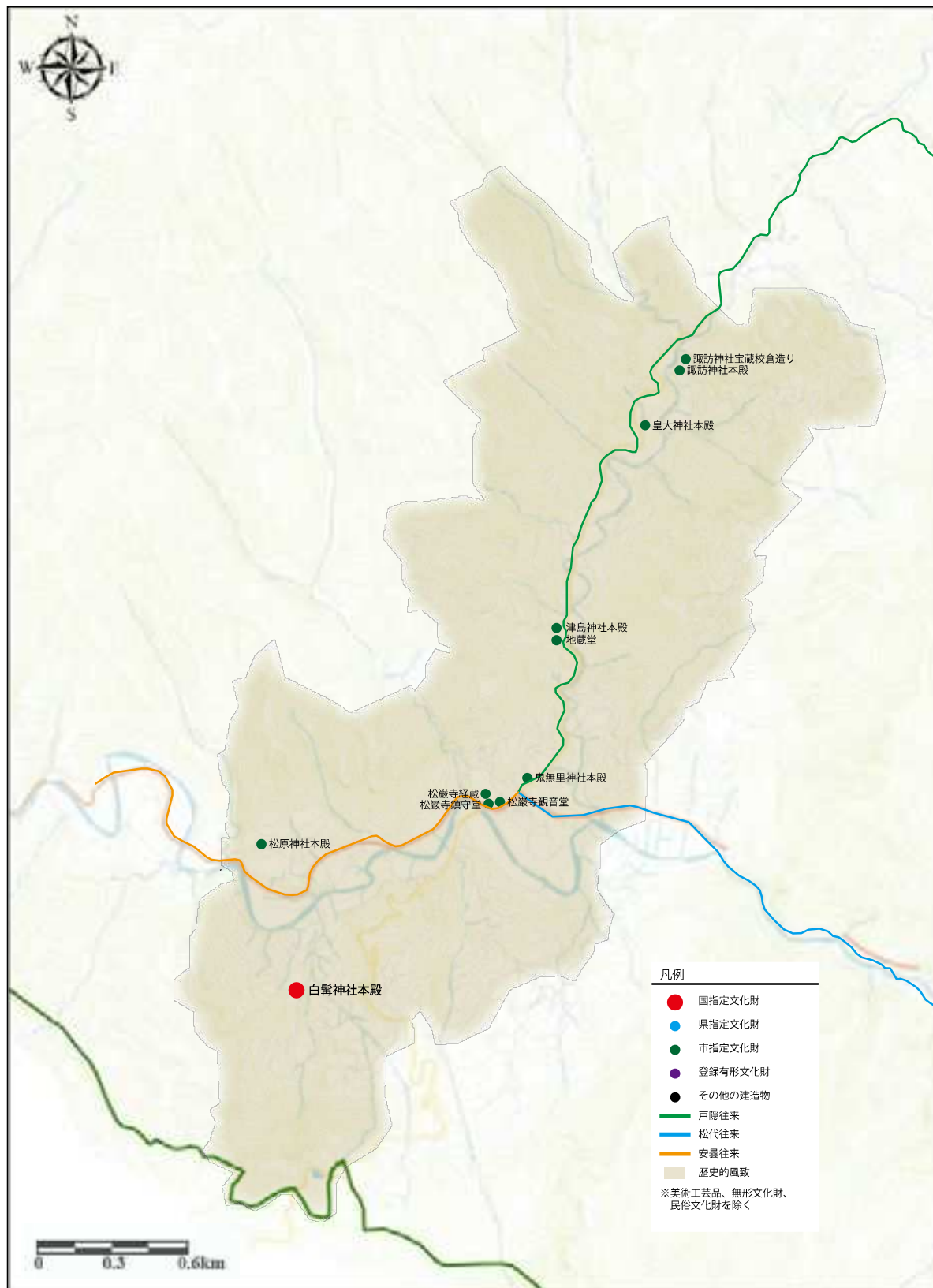
御柱の曳行順路 (S=1:10,000)

## エ まとめ

鬼無里では、鬼無里地区住民自治協議会と鬼無里観光振興会が連携してSNSや散策ガイドマップで鬼無里の寺社や伝統的な祭礼をPRしている。中山間地域に広がる農村風景の中、伝統的な祭礼は、祭礼を見物に訪れた観光客、鬼無里で研究実習をする大学生も祭礼に参加して賑やかに開催されており、鬼無里の大きな魅力となっている。

祭礼で使用される屋台や神楽<sup>かぐら</sup>は、鬼無里ふるさと資料館に常設展示されており、観光資源として、また、学生の研究にも活用されている。

長きにわたり継承されてきた鬼無里の伝統的な祭礼は、暮らす人々や大学生など地域内外の若者から高齢者まで幅広い世代が参加しながら、現在も継承されている。また、鬼無里らしい山並みの中、神社が配置された集落が、山々の間を流れる川の流域に点在し、そこでは、農業や林業が営まれて独特の集落景観を生み出しており、伝統的な祭礼、人々の暮らし、まちなみが一体となった歴史的風致が形成されている。



鬼無里の伝統的祭礼にみる歴史的風致の範囲(1/25,000)

## 都に思いをはせる美女紅葉

今から約千年の昔、会津の夫婦が魔王に祈って美しい娘を授かり、<sup>くれは</sup>呉葉と名付けました。16歳で都にのぼった呉葉は紅葉と名を変え、才知あふれる美しさがたちまち評判となって、源氏の棟梁、源経基の側室として寵愛を受けました。ところが経基公の御台所が病に倒れ、病状が重くなると「紅葉が呪い祈禱している」と噂が立ち、ついに信州戸隠に流されてしまいます。

水無瀬<sup>みなせ</sup>の里（※現在の鬼無里）にたどり着いた紅葉はその美しさと教養から村人たちに敬愛され、館で大切にされました。都をしのんで暮らす紅葉でしたが、経基や都への思いは消えず、再び上京しようと戸隠の荒倉山の岩屋に移り住みます。そしていつしか盗賊たちの首領に担ぎ上げられ、人々から鬼女と恐れられるようになってしまいました。

その噂が都に伝わると、<sup>みかど</sup>帝は信濃守平維茂<sup>たいらのこれもち</sup>に鬼女討伐を命じました。初戦は鬼の形相となった紅葉の妖術に敗れた維茂ですが、別所北向観音に必勝祈願をして授かった剣で再び紅葉を攻め、ついに紅葉は剣で討たれます。維茂は水無瀬に地藏尊を祀り紅葉の菩提を弔いました。戸隠、鬼無里の地にはこのほか幾多の「鬼女紅葉」物語が伝えられています。

